

日本体育学会
体育哲学専門分科会

会報

Vol.14 (2), August, 2010

記事

- ♪ 巻頭言
- ♪ 私の研究
- ♪ 書籍紹介
- ♪ 箱根合宿研究会に参加して
- ♪ 運営委員会からのお知らせ
- ♪ 次号予告

巻頭言

「品格」、「人格」を考える。

平井 章（島根大学）

戦後 60 余年が経過したが、政治、経済を始め社会全体において、現在ほど職業を問わず有名人の倫理観、道徳観の有り様が注目されてきている時代はないように思える。これには、様々な理由があると思われるが、その一つは今、日本社会全体が「子どもの国から大人の国」（マークス・寿子）への移行過程であり、その中で生じてきているからと思える。つまり現在の我国には、世界規模の立場から人間活動の全般に亘って成熟国家としてそれに相応しい行為規範が求められていると言えよう。

『国家の品格』、『女性の品格』、『親の品格』、『上品な人、下品な人』といった品格を問う著書が様々な分野においてここ数年来話題になっている。そこには、現代日本の品格の低下を憂う一方で、かつての誇りを取り戻し、世界に文化の模範となるべく我国の貢献を提言している。そのためには、品格ある個人の存在が前提となり、加えて家族、企業や社会が品格を持つことが求められるというものである。これらの著者達に共通するのは、主に数年間欧米で生活して日本の外から日本文化の特徴を海外のそれと比較し、合わせて文化全体を生み出してきた人々の活動全般を客観的に見たものと考えることができる。

ところで「品格」、「人格」とは何であろうか。辞書では、「品」とは、その人や物から感じられる好ましい優雅なさまであり、感じや印象を含めて品位ともいう。」とある。（『類語新辞典』角川）また品格とは、その人が身につけている品位となり立ち居、振る舞いが洗練されていることである。同様に「人格」は、道徳面から見た人の性格・品格」（同書）とあることから人格は、人に特有な行動の傾向、性質や好ましい感じや印象を指すものであり人間としての資格である。スポーツでいえばマナーやエチケット（道徳性）を身に付けている人と解して良いであろう。

エチケットとは、礼儀、作法のことで 19 世紀フランス、ブルジョア社交界の慣習や礼儀作法が今日のエチケットの基礎になっていると言われる。現代社会でエチケットとは、自分以外の総ての人に接する場合の心構えや態度と言うことができよう。その本質は、先ず他人に迷惑をかけない。他人に好感を与える。そして他人を尊敬する。ことであり、他人と接する時に持つ気配り、心遣い、つまり優しさと感性である。マナーは、習慣や身だしなみなど慣習的なルールを指すのに対して、エチケットは、さらに高度なルールや礼儀、作法など社会人として相応しい感性を持つべきとする要求度の高いものである。このよう

に品格を始めとして、マナー、エチケットは、時間的なゆとり、豊かさの中で洗練され育まれてきたものと言える。(ヴェブレン、『有閑階級の理論』)

しかしながら現代社会はどうであろうか。人々は、未だに経済活動中心の価値規範、つまり少しでも合理性、効率性を求めてあくせくし、多忙でゆとりをなくす方向に進んでいる。「忙」の文字通り心を亡ぼしているのである。「ゆとり教育」の変更も又然りである。現代のような風潮では、マナー、エチケットの定着はとても望めない。

教育活動は、知育、徳育、体育に分けて考えられているが、言うまでもなくこれらは明確に区分された領域ではなく相互に浸透しあって全人的形成を支えているものである。教育は究極的には人間がより良く生きることを目指すものであり、それは知識が行為化されることによって完成されるものであるから徳育の課題は、知行合一としての態度の形成にあると言える。従って道德教育の方法は、本質的には自立的な行為主体としての道徳的な態度形成に帰するが故に究極的には被教育者の自覚次第であると言える。

今やスポーツを始め、インターネットは言うに及ばず世界のグローバル化がますます進展している。真に成熟した日本社会になるために、また成熟した世界の仲間入りをするためには、これからは経済よりはむしろ、文化面をもっともっと整えることが必要であると考えられるであろうか。とりわけ倫理・道徳に一層関心を向け、今一度品格とは何かを考え直す必要がなかろうか。

(平井 章 hiraisho@edu.shimane-ac.jp)

私の研究

松本 真(埼玉大学)

スポーツの魅力とは何であろう？スポーツの価値とは何であろう？そんな単純な疑問が私の研究の最も根本に存在します。この問題に対して単なるスポーツが面白いという議論ではなく、その奥に秘められた構造を見つめながら研究を進めていこうとしています。これは大学院時代から変わらない部分（進歩していない）であります。

さて、上記のようなことを追い求めながらも、規模の小さな教育学部に所属する私は、大学教員として体育哲学だけでなく、実技のバスケットボールについても意見を求められるようになりました。現場の先生からの最も基本的な質問として「バスケットボールをどう教えたら良いのか解らない」というものです。このような眼前の現実的な問題に答えるために、バスケットボールの指導の実態とそれによって、解ったことを私なりに整理することにしました。

指導の実態は、パス、ドリブル、シュート等の最初に、個人技能の習得を目指します。そして、ある程度習得したら、タスクゲームを通して部分的な戦術、ボールを持たないところの動きなどを習得していきます。そして、最終的に、本当のゲームへと進んでいく、積み上げ式などと言われる過程を踏んで指導しています。しかしながら、これがうまく行かない事が多い。個人技能の習得に時間がかかる上に、本当のゲームに進んだ時に、タスクゲームの成果が見られない事が多いからです。

また、体育の時間の大切な思考力を養う教材として、バスケットボールの戦術面が採り上げられます。子供達が、戦術についてグループで話し合いながら、自分たちにとってより良い戦術を考えるという。しかし、所詮子供の考える事であり、なかなか上手く行かない。結局、先生が提示した事をやるだけになります（先生の提示した一例を忠実にやった

ところの方が、結果的に上手く行くことが多い)。

そして、一番気になったことが、先生、子供達の両者がバスケットボールというゲームを知らない事が多いということです。野球やサッカーのように社会的な認知がされていないという事です。体育でのバスケットボールの指導を考えた時に、実はこの最後の問題が一番大きいのではと、考えるようになりました。

以上のような実態と解ったことを検討した結果、バスケットボールというゲームを知らないということにつけるのではないかと考えました。そこで、現在の教科教育の潮流から外れるかもしれないが、ゲームとはこんなモノですよ、ということをごちらから提示してみることにしました。つまり、典型的な攻撃の一連のやり方である、ボールを保持してから、ボール運び、そしてハーフコートでのポジション取りを経てシュートまでを示すことにしました。つまり、戦術的な目指すべき姿とそこでの具体的なやり方を子どもたちの思考力に頼るのではなく、こちら側が提示してしまうのです。現在は、大学生を相手に実際に試行しています。感触は、なかなか良いと思っています。

さて、この全体像を示すという具体的なやり方は、教科教育においては、バスケットボール(バスケットボール型の球技)の指導方法に確立に寄与し、また、競技スポーツの世界では、今求められているジャパンオリジナルスタイルの確立に寄与するのではないかと考えています。さらに、バスケットボールというスポーツの体系を示すことになるのではと考えています。つまり、この全体像が、バスケットボールというスポーツの奥にある構造を具体化したものの一つと考えると私のライフワークとしての研究課題であるスポーツの価値とは何かという問題に近づくための試金石になるのではと考えています。

現在の私の研究についてです。かなり自己満足の部分もありますが、こんな感じでのんびりとやっております。

(松本 真 shin@hpe.edu.saitama-u.ac.jp)

書籍紹介

對馬達雄著. ナチズム・抵抗運動・戦後教育—「過去の克服」の原風景. 昭和堂. 2006.

釜崎 太(立正大学)

ドイツに留学中、いくども、そこが成熟した「大人の国」(平井先生の巻頭言からお借りして)であることを実感させられた。私が大学院への進学を決意した理由のひとつも、留学中に痛感させられた、「スポーツの充実のためには、スポーツのことだけに目を奪われるのではなく、風土や歴史や教育を深く考えていく必要がある」という思いであった。

南アフリカでおこなわれたサッカーのワールドカップにおいて、ドイツ代表チームの活躍—準決勝で敗れたとは言え—は、改めてその強さを世界に印象づけた。しかし、イギリス生まれのサッカーがドイツに伝播したのは19世紀も後半のこと。他のサッカー先進国と比較しても、決して“早い”というわけではない。加えて「体操の国」に育ったドイツ人たちは、サッカーを敵国文化とみなし排斥したのである。サッカーという外来文化がドイツに根づき、大衆化していくのは20世紀のことであり、ましてや市民参加型のスポーツクラブが組織化されるのは第二次大戦以降のこと。私たちが考えるべきは、彼らがどのようにしてナチ化された組織(その“体質”を含め)の徹底的な解体に成功し、市民参加型のスポーツクラブを実現させることができたのか、という問いであろう。あえて私は—スポーツには触れられていない—對馬達雄の著書『ナチズム・抵抗運動・戦後教育』に、その

解答の手掛かりを求めたい。

例えば、1994年の広島アジア競技大会を前に、広島原爆資料館を訪れた中国人民日報の記者は、軍都広島に加害者責任について、『『教訓を真剣に総括する』という面では、ナチスの戦争責任を迫り続けているドイツに『はるかに及ばない』(中国新聞、1994年8月1日付)と酷評している。もちろん、日本とドイツの暴力行為を同一視することも、両国を取り巻いていた戦後の国際状況の違いを無視することもできない。それでもなお、加害地(アウシュビッツ)に修学旅行におもむくドイツ人たちの「過去との対決」の姿に学ぶべき点は多い。同じ思いを對馬は次のように述べている。「ファシズムの《過去》が忘却のかなたに押しやられ、自ら思考し想像するという基本的な態度と真理感覚が急速に衰退している政治社会状況のただなかに、われわれが置かれていること、そのことが最低限他者とのかかわりのなかで自国現代史をみる歴史感覚を鈍麻させ、歴史と向きあう態度をも失わせていること、それだけにいまわれわれ一人ひとりにあらためて自立的な生への探究姿勢が求められ、とくに若い世代に歴史的教養の再生による政治意識の向上が必要とされていること、このことを筆者はつよく認識している」(p. 278)。

「過去との対決」の姿は、ドイツのスポーツ科学界にもみられるものである。例えば、戦後西ドイツのスポーツ史学界をリードしてきたハジョ・ベルネットは、スポーツとナチズムの蜜月を徹底的に暴き、ヨハン・タイヒラーは、ベルリン・オリンピックを擁護する社会学プロパーの論文に徹底した反論を加えている。繰り返すが、彼らは、“西”ドイツ・スポーツ史学界の第一人者たちである。

それでもあえて、“だが”、と反転させたい。そうした「過去との対決」の姿はむしろ、ドイツ国内の研究動向からすれば、日常的なものだろう。私が對馬の研究に着目したいのは、その副題の最後に示されている「原風景」についてなのである。

對馬は「過去の克服」の「原風景」を、第二次世界大戦中、ベルリン近郊の農村ティーフェンゼーで小学校の教員を勤めていたアドルフ・ライヒヴァインの教育実践に求めている。ライヒヴァインの学級では、例えば、「自然」という大テーマのなかの「動物」という小テーマにおいて、「巣箱づくり」から「ミツバチの観察」へ、という具体的な作業が実践され、一連の作業を子どもたち自身が考え出していくような仕方で、しかもティーフェンゼーという共同体とのつながりなかで、学習活動が展開されている。その「共同体」は「悪」に対する「理想」として描かれるのではない。クリスマスに両親への贈り物を考えたり、村人を招いて劇を上演するなどといった日常的な実践が展開されているのである。對馬は、そうした実践をヒトラー青年団との対立という当時の状況のなかに位置づけることで、ライヒヴァインの抵抗性を描き出している。對馬の研究が興味深いのは、ライヒヴァインの「身体」の体験的な教育がもつ抵抗性—ライヒヴァインの母親は体育教師であった—の指摘以上に、彼が「過去の克服」の「原風景」を、戦後の改革期にではなく、戦中の、しかも小さな農村の、ひとりの教師の実践に求めているところである。

ドイツのスポーツ改革の根本要因を探究しようとする場合にも、私たちは「ナチズムへの反省」という既定路線を離れ、戦前戦中の文脈のなかにその「原風景」を求めることができるのではないだろうか。たとえ戦後に至るまで全面的に展開されることはなかったとしても、市民参加型のスポーツクラブの「原風景」を、戦前の市民社会の微視的な実践に見出すことができるのではないか。その歴史的可能性を探究することで、私たちは、過去—現在—未来という単一的な時間感覚を揺るがす、新しい(現代日本への)示唆を得ることができるはずである。もちろん、そのような研究は—對馬の研究がそうであるように—、誰もが安心して読めるような理想像の描写にとどまることなく(理想論は、常に、その背

後に潜む現実的問題の忘却という危険にさらされている)、読み手の心を動揺させ、驚きと沈黙を導き、ときには論争を引き起こすような、「過去との対決」を伴うものでなければならぬだろう。ドイツのスポーツ組織をひとつの目標とする現代日本が、近隣諸国と手を取り合う、成熟した「大人の国」へと成長するためにも。

(釜崎 太 kamasaki@ris.ac.jp)

箱根合宿研究会に参加して

堀川翔平(京都教育大学)

今回箱根合宿に参加させていただき、数多くの先生方の研究発表を聴くことができたのは、自らを成長させる大いなる糧になったと感じています。同時に自らの勉強不足を再認識する結果にはなりましたが、それは逆に勉強意欲に繋がり、今後の研究に多大な影響を与えるだろうと思っています。

私自身、今回が初めての研究発表で、他の先生方の、特に大学院で勉強されている先生方の研究発表に注目して聴かせていただきました。傾向としましては、学習指導要領の改訂による、武道必修化と運動部活動の明文化に対する研究が多かったように思います。

他にも、スポーツと音楽の関係の研究があったり、余暇についての研究があったりと、当たり前ではありますが、様々な研究対象があること、そして同じ研究対象でも様々な切り口があるのだということに改めて感じ、研究の奥深さと幅広さを痛感しました。

私自身、この合宿で一番心掛けていたのは、自分の研究もしくは、自分の日常生活に活かせることを探すということでした。加藤先生の運動指導の研究では、「カン」「コツ」「センス」の違いに気付くとともに、指導の難しさを痛感したり、大出先生の理想の体育教師像の研究から、「自由」という言葉の曖昧さとそこからくる難しさを感じたり、鈴木明子先生の余暇の研究から自分の余暇の使い方を考え直したり、またその他の研究からもこれから自分が生きていく中で必要なこと、将来のために考えるべきことなど様々なことについて考えることができました。自分が今、何を考え、何をすべきなのか、少しではありますが整理できたように思います。

最後になりましたが、このような会に参加させていただき、誠にありがとうございました。今後さらなる発展を目指し、勉学に励んでいきたいと思っておりますので、ご支援の程よろしく願いいたします。

(堀川翔平 eu_zen_sport@yahoo.co.jp)

運営委員会からのお知らせ

新保淳(静岡大学)

運営委員会選挙結果について

選挙管理委員会委員長 小林 日出至郎委員長より運営委員選出規定第4条に従い、選挙結果の報告がありましたので、お知らせいたします。

1. 開票 : 平成22年5月21日(金) 15時00分より
2. 開票者 : 小林日出至郎(委員長)、石垣健二(委員)

3. 開票結果；①投票者数：49，②投票総数：561，③有効投票数：559，④無効投票数：2，
⑤得票数；以下、順に記す

(1) 新保 淳	31	
(2) 深澤 浩洋	23	
(2) 舛本 直文	23	
(4) 阿部 悟郎	22	
(4) 釜崎 太	22	
(4) 久保 正秋	22	
(4) 佐藤 臣彦	22	
(8) 小林 日出至郎	21	
(8) 服部 豊示	21	
(10) 関根 正美	20	
(11) 石垣 健二	19	
(11) 近藤 良享	19	
(次) 畑 孝幸	17	
井上 誠治	16	
林 英彰	16	
大橋 道雄	15	
木庭 康樹	13	
杉山 英人	13	
滝沢 文雄	13	
樋口 聡	10	以下 省略

「日本体育学会第61 回大会（中京大学）のプログラム」

9月8日（水）10：30－12：30

【シンポジウムA】

テーマ：体育哲学における学校体育論議の検討と視界

(2) 学校体育論議の起点としての哲学的源泉

司会者：大橋道雄（東京学芸大学）・阿部悟郎（仙台大学）

演者：

佐々木 究（山形大学）：ルソーの視界－学校体育への思想的前提として－

森田 啓之（兵庫教育大学）：デューイの視界

関根 正美（岡山大学）：ヤスパースの視界

久保 正秋（東海大学）：体育哲学の視界

9月8日（水）13：20－14：20

【キーノートレクチャー】

テーマ：ドーピング問題～過去、現在、そして未来

講演者：近藤 良享（中京大学）

司会者：久保 正秋（東海大学）

9月9日(木) 9:30-11:00

【シンポジウムB】

テーマ：体育学における質的研究方法の展望

司会者：新保 淳（静岡大学）

演 者：田中 愛（武蔵大学）：体育学における質的研究方法の展望：現象学の
視点から

渡辺 英児（龍谷大学）：スポーツ科学における質的研究法の可能性：スポーツ
心理学の視点から

上原三十三（愛知教育大学）：質的研究法の可能性－モルフォロジーの視点から

【一般研究発表】

9月8日(水) 14:30~16:00

口頭発表1 座長：釜崎太（立正大学）

14:30 坂本 拓弥（千葉大学大学院）：運動部活動における指導者の存在様態に
関する考察－ルネ・ジラルの「《三角形的》欲望」論に基づいて－

15:00 福本 まあや（富山大学）：日米のボディワークの比較研究－「イメージ」
の果たす役割に着目して－

15:30 跡見 順子（東京大学アイソトープ総合センター）：重力生物学基盤からの
体育原理・身心関係・健康基盤の再構築（その二）－ホメオスタシス原
理とマイルドストレスからの体力原理の再検討

9月9日(木) 13:00~14:30

口頭発表2 座長：河野清司（至学館大学）

13:00 深澤 浩洋（電気通信大学）：＜肉＞の概念による意味生成体験の解釈

13:30 林 洋輔（筑波大学大学院）：デカルトの心身理解と身体教育の理論的前
提－人間身体の生成と存立へ向けて－

14:00 王 水泉（広島大学大学院教育学研究科）：「身体知」研究のための問題の
展望

9月10日(金) 9:30~12:30

口頭発表3 座長：三原幹生（愛知教育大学）

9:30 小林 日出至郎（新潟大学教育学部）：『イリアス』の運動競技における精
神的特性に関する研究

10:00 高橋 徹（国士舘大学大学院）：スポーツの経験と教育

10:30 大橋 奈希左（上越教育大学）：ダンス学習における「即興」についての
考察－その発現域に着目して－

座長：新保淳（静岡大学）

11:00 鈴木 志麻（東海大学体育学研究科）：運動部活動における教育的意義－
学校教育で行う必要性－

11:30 鈴木 明子（東海大学体育学研究科）：余暇体験の概念と意義

12:00 舛本 直文（首都大学東京）：オリンピック教育にみる「平和運動」－2008
年北京大会を事例に－

9月10日(金) 13:30~15:30

口頭発表4 座長：高根信吾(富士常葉大学)

- 13:30 釜崎 太(立正大学)：思想としての“広島”オリンピックーもうひとつの平和運動をひらく「痕跡たち」ー
- 14:00 森田 啓(千葉工業大学)：新自由主義を変える体育の可能性
- 14:30 岡部 祐介(早稲田大学大学院スポーツ科学研究科)：スポーツにおける「根性」論の成立過程に関する考察ー戦後のわが国におけるスポーツ観形成への一視角ー
- 15:00 大出 達彦(東海大学体育学研究科)：理想の体育教師に関する一考察ーA. S. Neillの理念に基づいてー

「分科会メーリングリストへのご登録のお願い」

メーリングリストへ登録済みの方は現在のところ63名です(2010年7月28日現在)。これらの方々へはメーリングリストによって会報が配信されております。速報性、経済性、分科会活性化の観点から、是非ともご登録をお願い申し上げます。次のような手順で登録できます。

- 1) グループへ参加するには、事務局ehashin@ipc.shizuoka.ac.jpまでご一報ください。
- 2) 登録完了後、taiikutetsugaku@yahoogroups.jpを用いてグループメンバーにメッセージを配信することができます。
- 3) [taiikutetsugaku]グループについてのお問い合わせグループ管理者(事務局)：taiikutetsugaku-owner@yahoogroups.jp

次号予告！

次号は研究情報などの内容でお届けする予定です。投稿を下さいます方は釜崎太(立正大学：kamasaki@ris.ac.jp)までお問い合わせ下さい。

体育哲学専門分科会報第14巻第2号

発行者 日本体育学会体育哲学専門分科会
大橋道雄(会長)
編集者 阿部悟郎(広報委員長)
発行日 平成22年8月6日

連絡先 989-1693 宮城県柴田郡柴田町船岡南 2-2-18
仙台大学体育学部
0224-55-1147(直通)
アドレス：gr-abe@scn.ac.jp

【編集後記】

猛暑続きの中、会報をお届けします。まずは執筆者の深謝。さて、夏期合宿研究会は、大盛会でした。若手の大いなる台頭。迎え撃つ中間?世代。理知の鏡のご年長。ひとえに研究会をとりしきってくださったFZ先生に感謝。さて一つ超えたら次の山。いよいよ日本体育学会です。此度は、一般研究発表が大盛況です。分科会の学問力は、何ととっても一般研究発表。大いなる期待を胸に、彼の地でお会いしましょう。いざ、中京!(A 拝)